

宗教を超えて福音へ向かう旅路 — 『深い河』の天津と本田哲郎神父を中心に

李 英 和

【要旨】

本稿は、遠藤周作の『深い河』の天津を中心において、従来の先行研究ではほとんど触れられてこなかった、虚構と現実といったテーマに着目して論を進めていった。筆者は天津の人生を追っていくうちに、天津のような司祭が作中だけでなく、現実の司祭の中にもいるのではないかと思うようになった。そのようなわけで、大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者の支援活動に携わる本田哲郎神父の今日に至るまでの人生の軌跡や彼の思いや考え方を知るに至った。そこで本稿では、天津と本田哲郎神父の生き様に注目して、彼らはキリスト教及び宗教そのものについてどう考えているかについて探ってみた。

虚構と現実の人物が司祭としてそれぞれの場で活動しながら、果たして彼らが最終的に求めているものは何かについて考察したものである。

キーワード：深い河、天津、本田哲郎、宗教、本質、福音

1. はじめに

1993年、講談社から刊行された『深い河』は、遠藤周作の最終作である。インド旅行に参加する磯辺（1章）、美津子（2章）、沼田（4章）、木口（5章）に関する話、インドへ到着してからは天津の話（10章）が加わり、5人を中心とする話とインド旅行中に起こる様々な出来事がそれぞれ独立した章として構成されている。遠藤周作文学の「総決算というべきもの」¹と評価されているように、全13章の中に様々なテーマが盛り込まれている。様々なテーマが美津子を中心とする一つのテーマと流れに収斂されていくかと思えば、最終的には天津を中心とした展開を見せる。それだけに先行研究も天津と美津子を中心とするものが多くみられる。

先行研究を総括するというならば、『深い河』は、作中人物『それぞれ』が超越的なものとの関わりを得た、『宗教的なるもの』を得た作品²であるとか、「母なるもののイメージが『深い河』では、キリスト教の枠に留まらないで拡大され新たな意味をもって捉えなおされている」³、あるいはまた、「遠藤周作は、作家として、自分の信仰を日本の文化の中で具体化する方法を作り出そうとした」、「そのために、より広く普遍的な意味でキリスト教信仰を再

解釈し日本の現実に適合させた」⁴といった評価が下されている。また、さらに「宗教の範疇を越えて、人間存在の根源的な問題を直視することによって、病める人間の魂の癒しと救済の主題が暗示的な手法によって表現されている」⁵という見解を示しているものもある。

しかし本稿では、先行研究を参考にしながら、従来の先行研究ではほとんど触れられてこなかった、虚構と現実といったテーマに着目して論を進めていきたい。というのは、筆者は大津の人生を追っていくうちに、大津のような司祭が作中だけでなく、現実の司祭の中でもいるのではないかと思うようになった。そのようなわけで、大阪あいりん地区（釜ヶ崎）で日雇い労働者の支援活動に携わる本田哲郎神父の今日に至るまでの人生の軌跡や彼の思い、考え方を知るに至った。そこで本稿では、大津と本田哲郎神父の活動や語りに注目して、キリスト教や宗教という枠に留まらず、最終的に彼らは何を求めているのかという観点から考察を試みたい。

2. 旅立つ大津

2.1 自己への旅路

先述したように『深い河』は全13章の構成の中に様々なテーマが盛り込まれている。その中で特に大津をめぐる話に焦点を当てると、ある明確な神学的意図が込められていると思われる。周知のように、全13章のうち大津に関する部分は、「10章 大津の場合」でまとまって展開されており、「11章 まことに彼は我々の病を負い」でも彼の宗教に対する考え方や、インドでの生活の様相などが短い分量でありながら詳細にまとめられている。ただ、彼の名前は美津子の回想を通してかなり早いうちから出てくる。大津の存在を浮き彫りにするための方法であると考えられる。ストーリーを追いながら大津が描かれているところを簡単にまとめると以下のとおりである。

2章の最終部、タクシーに乗った美津子は、自分が卒業した大学のそばを通りかかると、大学時代を思い出すとともにすぐ大津のことを思い浮かべる。2章の最後は、「あのピエロが彼女の前に現われたのだ。彼女が弄んだ大津が……」、という一文で締めくくられている。3章では、美津子と大津との関わり合いや、その後の二人の様子や状況などがより具体的に描かれている。しかし、3章まで待たなくても、上述の2章の最後の一文から、あらかじめ二人の関係がだまかに推測できる仕組みになっている。しかも短い文章でありながら、美津子が大津という名前より、「ピエロ」という彼のあだ名を先に思い出すことは、それだけ「ピエロ」という言葉の重みを考えさせられる。「ピエロ」という言葉が意味することについては後述することにする。6章では、美津子がインド旅行に持ってきた大津からの手紙が紹介されているが、この手紙は二人がリヨンで会って以来、大津の状況や考え方などを知るために欠かせない情報源でもある。

以上、大津に関する話がまとまって展開されるまで、いくつかの章に散りばめられている箇所をだまかにまとめてみた。これらは、すべて美津子を媒介にして伝えられる。いわば、

10章に至るまで大津が何をどう考えているのか、どんな状況に置かれているのかなど、彼に関するすべてのことは、美津子を通して伝えられるのである。

ここでまず、二人がリヨンで再会したときに交わした言葉と、美津子宛てに送られてきた手紙を中心に、大津がヨーロッパ、もしくはヨーロッパのキリスト教に抱いている違和感と距離感、また彼が考える神概念について論を進めていきたい。

大学生の時以来、二人はお互いに連絡をとることはなかったが、自分が棄てた大津がフランスのリヨンにある神学校に入ったという情報を得た美津子は、新婚旅行でフランスを訪れた際、大津に会いにリヨンへ寄った。いわば美津子は、自分が棄てた大津がなぜ神学校に入ったのかその理由が知りたい、ということをお口実にしてわざとリヨンへ行ったのである。予期せぬ美津子の訪問を受けた大津は、なぜ神学生になったのかという過去のことを思い出させる意地悪な質問を彼女からされる。しかし、それよりもっと注目すべきところは、大津自身、今現在自分が置かれた状況や自分が思う神について美津子に打ち明ける点である。大学生の頃、美津子に棄てられた大津は、「おいで、私はお前と同じように捨てられた。だから私だけは決して、お前を棄てない、という声を」聞いて神父の道を決意した。当初、彼は憧憬をもってヨーロッパの神学校へ留学を決めたはずである。しかし、リヨンの神学校で3年も学んでいたにもかかわらず、ヨーロッパのキリスト教に違和感を感じ、現在置かれている状況の中で揺れ動いている大津の様子が窺われる。

三年間、ここに住んで、ぼくはこの国の考え方に疲れました。彼等が手でこね、彼等の心に合うように作った考え方が……東洋人のぼくには重いんです。溶けこめないんです。(218頁)

久しぶりに会った美津子に自分の心の奥底にある思いを語る言葉から、ヨーロッパの思考に融和できず苦しんでいることが推測できる。神父になるためリヨンの修道院に入って何年も教義を教わっているものの、ヨーロッパのキリスト教に違和感を感じて葛藤している彼の様子が見てとれる。

ところで、上記の引用は、遠藤の最初の小説「アデンまで」(『三田文学』1954年)の「俺」のヨーロッパの体験を思い起こさせる。もちろん、二つの作品はそれぞれ1954年と1993年に発表され、40年余りの時間差を持つ。さらに、物語の時代背景も「アデンまで」は1950年代頃を、また『深い河』は1970年代頃から1980年代頃を描いたものと推測されるので、20年以上の時間の隔りがある。しかも、留学の目的や動機なども違う。何よりも、「アデンまで」の「俺」の場合は、フランス留学に挫折して日本に帰る留学生という設定になっている。ところが、大津の場合は、留学を途中でやめて帰ろうとせず、日本に戻ったら「日本人の心にあうキリスト教を考えたい」と思っているのである。しかしながら、「俺」と大津、この二人がヨーロッパでの実体験の中で気づいたことや考えたこと、そこから生じる葛藤な

どは相通じるところが多い。では、ここでヨーロッパに対する思いを総括的に表わした遠藤の言葉を見てみよう。

このヨーロッパは日本人の感覚ではついていけぬ何かがある。善の深さも悪の深さも、その高貴な精神もその美しい芸術も。私はわずかな歳月ではあったが巨大なその壁にぶつかり、自分とこの国々との距離感だけを強く意識するようになった。そしてその挙句「病気になった」⁶。

作者遠藤自身も、1950年にフランスへ留学するが、健康を害したため3年足らずで帰国せざるを得なかった事実がある。それゆえか、「アデンまで」は、フランス留学に挫折して日本に帰る留学生という人物設定や、物語時間などがそのまま遠藤自身の経験と符合するところが多くある。このように『深い河』には時間の隔たりを超えて、最初の小説のテーマや作家の思いがそのまま持ち込まれていることがわかるだろう。いわば、最初の小説のテーマが40年あまりの隔たりをもって再び最終作のモチーフとして持ち込まれたと言えよう。それでは話を本題に戻して、自分が置かれた状況を大津はどういうふうを受け止めていくのか、彼の言葉を通して見てみよう。

大学生の時、大津は美津子から神は存在するのかと聞かれたとき、「信じているか、信じていないか、あまり自信がな」かった。ところが、「でも今はぼくなりになっています」と答える。しかも、神という言葉に嫌がる美津子のために、神を「玉ねぎ」に言い換えて、「神は存在というより、働きです。玉ねぎは愛の働く塊りなんです」といい、「神」という言葉にこだわらない様子が見てとれる。このような考え方は、やはり遠藤の思いがそのまま反映されていると考えられる。遠藤自身、「神というものは対象」ではなく、「その人の中で、その人の人生を通して働くものだ」⁷と考えているからである。

しかしながら、この隠喩的な表現は、神が特定のイメージに固定されることを阻止する役割を果たすと思われる。それゆえ、宗教を持っていない、あるいは神に関心がない人には、神についての概念的な理解が得られると考える。昔、大津は毎日神に祈りをしてきたものの、その時は神の存在について自信を持っていなかった。ところが、今は相手に、つまり美津子に「玉ねぎ」という言葉を用いて話せるほど、大きな変化が見られる。このような大津の言葉から考えると、神に対する理解が作品の中での最後の到達点に向けて深まっているといえよう。それでは、大津の神への理解はいかなるものであろうか。引き続き、大津の話に注目してみたい。

「ぼくは玉ねぎを信頼しています。信仰じゃないんです」(218頁)

上記の引用から、大津が理解する神や、彼が考えるキリスト教、さらに宗教そのものにつ

いての彼の考えを垣間見ることができる。カトリック教会の司祭を志している人が自分が信じる神を「信仰」するのではなく、「信頼」していると言ったのはどういう意味合いなのだろうか。「信仰」と「信頼」は一見似ているが意味の違う言葉である。「信仰」の辞書的な意味は、①神仏などを信じ崇めること。経験や知識を超えた存在を信頼し、自己をゆだねる自覚的な態度をいう。②人を信じうやまうこと⁸、となっている。特に、キリスト教における信仰とは、イエスが——神の子、あるいはメシアとして——神と特別な関係にあると信じることとされる。イエスの十字架上の死と復活の後、「救世主イエス」「神の子イエス」に対する信仰は、イエスの弟子たちにより展開・確定し、原始教団の信仰の核となっていった。それ以来、キリスト教徒にとっては、唯一の神への信仰は同時にイエス・キリストへの信仰となった。キリストを信じることにより罪のゆるしが得られるのであり、キリストを信じることは救いのための唯一の必要条件である⁹、とされるようになった。

一方、「信頼」の辞書的な意味は、信じて頼ること¹⁰、となっている。「信仰」と「信頼」は、両方とも「信じる」という意味が含まれているが、いわゆる「信仰」という表現は、転じて、何らかの対象を絶対のものと信じて疑わない状態のことを指すようにもなっている。

このように二つの言葉の違いから考えても、キリスト教の信者であり、しかも司祭を志している人であれば、むしろ「信仰している」と話すのが妥当ではないだろうか。大津はむしろわざと二つの言葉を区別して使ったと考える。この言葉を聞いた美津子が、「あなたは……破門にならないの」とからかうと、大津はすでに修道会から「異端的な傾向がある」と言われていることなど、自分が置かれた状況を美津子に明かす。異端というのは、単に教会の教えを認めない、あるいは守らない事ではなく、普遍とされる教義を否定する事である。こうしたことから考えると、やはり大津が信頼している「玉ねぎ」、つまり、彼が自分なりにわかっているといった神と、神学校で教わった教義との間に差が生じたと思われる。大津は神学校から異端扱いされるようになるが、大津が美津子宛に出した手紙を通して、そこまでに至った経緯を見てみる。

①「神とはあなたたちのように人間の外にあって、仰ぎみるものではないと思います。それは人間の中にある、しかも人間を包み、樹を包み、草花をも包む、あの大きな命です」(262頁)

②「神は色々な顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います」(264頁)

③「今は中世とちがいます。他宗教と対話すべき時代です」 / (中略) / 「でも基督教は自分たちと他宗教とを対等と本当は考えておりません。 / (中略) / 他の宗教の立派な人たちは、いわば基督教の無免許運転をしているようなものだ」とあるヨーロッパの学者が

おっしゃっていましたが、これでは本当の対等の対話とは言えません。」(265頁)

上記の引用①②③(番号は筆者がつけたもの)は、大津が美津子宛に出した手紙の内容の一部である。フランスから日本へ戻ってきた美津子は、四年後、大津宛に手紙を出すことになるが、それに対する大津からの返事である。引用①は、先輩たちから「お前にとって神とは何なのだ」と聞かれた際、大津が答えた言葉である。神とは「仰ぎみるものではない」といったところは、前に引用した「ぼくは玉ねぎを信頼しています。信仰じゃないんです」といった言葉と相通じるものがある。しかし、このような大津の答えは、神学校の先生や先輩から「汎神論的な考えかた」と思われて、叙階を延期される原因となった。この時点で彼はすでにリヨンの修道院から南仏の修練院に移されており、その理由は、神父になるのに非適格とされたからであった。

引用②と③は、イスラエルのガリラヤ修道院にいる大津が送った二回目の手紙の内容の一部である。南仏の修練院にいた大津は、再び叙階を延期されて今度はイスラエルのガリラヤ修道院に移ったということである。引用②と③は、大津が口頭試問の時、自分の考えを述べたものであるが、またもや叙階されなくなった理由でもある。しかし、このような大津の考えは司祭になってからも終始変わることがない。特に引用②のような考え方は、イギリスの神学者であるジョン・ヒックの宗教多元主義思想の影響であることは、作者遠藤¹¹をはじめ、すでに多くの先行研究で指摘されている。その中で武田秀美は、遠藤がヒックの宗教多元主義思想を神学上の理論まで取り入れて展開するのではなく、世界宗教との対話という一つの可能性を追求したところに、その独創性をみている¹²。なお、笠井秋生は、「遠藤はヒックより十年近くも前に宗教多元主義的な考えを抱いていた」¹³と言っている。

引用③は、「正統と異端の区別を君はどうするのかね」という先生たちの質問に対する大津の答えであるが、第2バチカン公会議¹⁴のことを再認識させようする意図がうかがえる。第2バチカン公会議が遠藤文学に影響を与えたという意見は、既に『沈黙』(新潮社、1966年)の研究の中で扱われていた。小嶋洋輔は、同時代のカトリック教会の動きを視座に入れて、作品が刊行された時代をその背景に据えることで遠藤の相対化を図っており、その主な出来事として「第2バチカン公会議」をあげている¹⁵。

第2バチカン公会議が、教会の刷新の原動力になったことは周知のとおりである。その刷新事項の主な四つの特色の一つは、キリスト教以外の諸宗教の持つ価値を認め、対話を通じて世界の善のために協力しようとしたことである。そこで可決された刷新事項は、16の文書¹⁶にまとめられ、公文書として交付された。これらのことからわかるように、第2バチカン公会議は、カトリック教会が西欧中心の西欧型のキリスト教から、世界に開かれた教会へと移行してゆく契機となった。

しかしながら、上記の大津が答えた言葉の意味から推察すると、カトリック教会の聖職者たちの中には、キリスト教こそが唯一の普遍的宗教であるという意識があったとも推測され

る。自分たちと違う見解を持っている大津に対して、「それほどヨーロッパが嫌なら、とっとと教会を出ていけばいい。我々が守るのは基督教の世界で基督教の教会なのだから」¹⁷、といった聖職者たちの頑なな言葉がこのことを裏付けている。

以上、美津子の回想を通して大津の存在やヨーロッパのキリスト教に対する違和感と距離感、また彼が考える神概念などを探ってみた。大津の体験や言葉からすると、ヨーロッパの修道院や神学校は、従来のヨーロッパを中心とした認識から少しも変わっていない。それゆえ、彼らと意見や考えに食い違いが生じ、ヨーロッパの神学校や修道院などを転々とする羽目になったが、大津は決して自分の考えを曲げない。では、ヨーロッパの神学校や修練院の経験を経て、インドへ行った大津の生き様はいかなるものであるかをみてみよう。

2.2 教会からアーシュラムへ

前節では、カトリックの司祭になるためヨーロッパの修道院で勉強を続けていた大津の様子や彼が置かれていた状況などを探ってみた。大津は汎神論的な感覚を持っているということで、異端扱いされて何度も叙階を延期された。それゆえ、リヨンの修道院から南仏にある修練院に移され、さらにイスラエルのガリラヤ修道院に移されて勉強を続けているということも前節で述べた。小説内では、それ以来、彼に関する情報は何年も途絶えることになる。大津の名前が再び出てくるのは、美津子が久しぶりに参加した同窓会であった。彼が神父になってインドにいるという情報を入手した美津子はインド旅行を決意する。しかし、彼に関する他の情報は何もない。叙階に至るまで幾度も挫折した大津がいつ、どうやって神父になったのだろうか。一体どんなことを考えて日本に帰らずインドに行ったのか、さらに、そこでどんな生活をしているのか、などは一切わからない。にも拘わらず、美津子は自分が何のためにインド旅行に参加したのか、自らこれという答えが見つからないまま大津がいると推測されるインドのヴァーラーナシィに来ているのである。

この節ではインドで働いている大津の生き様を追っていき、彼の考えから何が見えてくるのかを探りたい。美津子は、大津を探すために現地教会を訪ねる。ところが、大津の名前を聞いただけで顔に不快感を表わす老神父の態度や、「我々は彼について責任を負っていない」という発言からすると、彼はその教会からも厄介者扱いされていると推測される。大津はインドで邂逅した美津子に、自分は教会ではなくヒンズー教徒のアーシュラムにいると言うが、彼はもはや教会から追い出されたと思われる。

上述のとおり、彼が神父になってインドに来た経緯についてはもちろん、インドの教会でどういう出来事があったのか、などについても説明がまったくない。大津の話によると、彼はヒンズー教徒の服装をして、死んだ人を背負って火葬場まで運ぶ仕事をしているという。ヒンズー教徒の服装をしたのは、宣教師の服装では火葬場に入れないから、という単純な理由からであったが、どうやら彼は教会の教義に従わず、逸脱した行動をとった可能性が高い。神学生の時から、ヨーロッパ的キリスト教に懐疑を抱いていた大津は、様々な逆境を乗り越

えて何とか神父にはなれたものの、未だに教会の教義とは違う見解を持っていると考えられる。しかし彼は、決してカトリック教会そのものを否定するわけではない。むしろ自分は、キリスト教の神父であることを明らかにしている。しかも、朝起きると、「自分の部屋で一人だけのひそかなミサ」をささげるといった行為からは、彼は神父という職を辞めず、神父として生き続けようとする彼の覚悟が読み取れる。自ら落伍した神父であると言っている大津は、果たして何を考え、何を求めているのだろうか。そもそも彼が神父であることの意味は何だろうか。

前節でも触れたが、ここで大津が言っている「玉ねぎの愛」についてももう一度考えてみたい。大津は玉ねぎをいかなるものとして認識しているのか。以下は大津が美津子宛に送った手紙の中の一部である。

少年の時から、母を通してぼくがただひとつ信じることのできたのは、母のぬくもりでした。(中略) 玉ねぎとはこのぬくもりのもっと、もっと強い塊り——つまり愛そのものなのだと教えてくれました。大きくなり、母を失いましたが、その時、母のぬくもりの源にあったのは玉ねぎの一片だったと気づきました。そして結局、僕が求めたものも、玉ねぎの愛だけで、いわゆる教会が口にする、多くの他の教義ではありません。(262 頁)

上記の引用をみると、少年の頃、大津が信じたのは、「母のぬくもり」であった。しかしその時は、「母のぬくもり」が「玉ねぎの一片」であることに気づかなかった。大きくなってから気づいたということは、「玉ねぎの愛」をもっと深く理解するようになった、ということだろう。いわば、「玉ねぎの愛」に対する理解が深まり、宗教的観点からいうと信仰が成長したといえよう。しかしながら、大津がこの手紙を書いたのは、リヨンの修道院から南仏アルデッシュにある修練院に移った後なので、インドで美津子に会って話を交わしている現時点から、かなり時間的な隔りがある。上記の手紙を出してから、何年も時間が経ったということになるが、その後の大津の「玉ねぎの愛」に対する理解はどう変わっていったのだろうか。様々な挫折を乗り越えて、何とか叙階されてインドに来たと思われる大津は、教会から追い出されても、周りの評判も気にせず、ひたすら玉ねぎの真似をしている。彼にとって、玉ねぎの真似をすることにおいては、宗教の違いなどは重大なことではないのだ。なぜなら、「玉ねぎがこの町に寄られたら、彼こそ行き倒れを背中に背負って火葬場に行かれたと思う」からである。このようなわけで、自分が求めてきた「玉ねぎの愛」が、いかなるものであるかをすでに理解していた彼には、「教会が口にする、多くの他の教義」は大切ではなかった。それより、彼にとっては、玉ねぎの真似をすることで自ら「玉ねぎの愛」を実践していくことが、何よりも大切なことであったと考えられる。しかしながら、彼のこのような行動は、教会側からは認められず、追い出された原因であったと思われる。美津子に、「でもあなたは一生を台なしにしたわ」と言われたとき、彼は次のように語る。

④「玉ねぎが殺された時」(中略)「玉ねぎの愛とその意味とが、生きのびた弟子たちにやっとわかったんです。(中略)弟子たちは玉ねぎの生涯の話をするために遠い国に出かけました。」(318頁)

⑤「以来、玉ねぎは彼等の心のなかに生きつづけました。玉ねぎは死にました。でも弟子たちのなかに転生したのです」(318頁)

上記の引用④と⑤(番号は筆者がつけたもの)の天津の言葉から考えると、「玉ねぎの愛」についての理解がもっと深まり、広がっていることがわかる。弟子たちは、「玉ねぎの愛」とは何であるか、「その意味」がわかったのである。それで弟子たちは、「玉ねぎの生涯の話をするために遠い国に出かけ」と言っている。天津はその当時の弟子たちが、何を伝えるために遠い国に出かけたか、つまりどういう使命を持って宣教に行ったのか、その意味が分かったのだ。ここで言う「弟子たち」というのは、昔、玉ねぎの死を目撃した当時の弟子たちだけを指すのではなく、今現在、神父の道を選んで「玉ねぎのまね」をしている、天津自身も弟子の一人であることは言うまでもない。「玉ねぎの愛」によせる天津の思いは、それほど確信に満ちているのである。

さて、ここで教会の教義より、「玉ねぎの愛」をもっと大切にする天津は、宗教そのものについてはどう考えているのか。彼が何度も繰り返して読んでいる、という本の箇所を取り上げて考えてみたい。

⑥「私はヒンズー教徒として本能的にすべての宗教が多かれ少なかれ真実であると思う。すべての宗教は同じ神から発している。しかしどの宗教も不完全である。なぜなら、それらは不完全な人間によって我々に伝えられてきたからだ」(323頁)

⑦「さまざまな宗教があるが、それらはみな同一の地点に集り通ずる様々な道である。同じ目的地に到達する限り、我々がそれぞれ異なった道をたどろうとかまわないではないか」(323頁)

天津はアーシュラムに住んでいると言っていたが、そこで彼に与えられた空間は部屋といえないほど狭い寝場所に過ぎない。そのベッドの上には、祈祷書、ウパニシャッド、マリア・テレサの本、ガンジーの語録集などが放り出されている。引用⑥と⑦は、ガンジーの語録で、彼が好きな言葉であり、彼はこれらの言葉を繰り返して読むという。同じ箇所を繰り返して読むということは、共感するところがあるからであろう。振り返ってみれば、天津は、リヨンの神学校や南仏の修練院でこの言葉と同じような見解を述べたことがあるがゆえに、上司や同輩から辛い思いをさせられ、結局叙階されなかった過去がある。天津もこの語録を

読むたびにその頃を思い出す。ところで、彼がこの語録を知る前から、彼自身も同じ気持ちを抱いていたことは注目に値する。大津は神学生の中から、教会が歩いていくべき道をいわゆる教会の聖職者たちに先立って主張してきた。その気持ちは神父になった今日に至るまで変わることはないが、前節で述べたように大津が置かれた状況を見ると、あれからかなりの歳月が経ったのにも関わらず、教会の立場は変わっていない。大津は教会の中で同じ見解を持っている人がいないため、ガンジーの語録を読むことで、考えを共有することができたと思われる。しかも、大津が持っている何冊かの本を見ると、キリスト教関連の本だけではなく、様々な宗教の経典やそれと関わりのある本もある。このことから大津の信仰世界を窺うことができる。教会から追い出されたとしても、彼はまだカトリックの神父（自ら落伍した神父であるというが）であるから、カトリック関連の書籍が多いかという点、祈祷書しか見当たらない。大津は自分が属している教会、つまり自分の宗教だけではなく様々な宗教の経典などを読むことによって、さらに思惟が深められていったと考えられる。したがって、彼にとって宗教の違いは言うまでもなく、もう宗教という枠組みを超えて、教えの本質だけをひたすら実践していくことができたのだろう。

最後に、大津はヒンズー教の規則を犯した日本人の旅行者の身代わりになってヒンズー教徒から暴行を受け、その傷がもとで死を予感する。彼の生き様は、生きていく上で最も大切なもの（大津はそれを「玉ねぎの愛」といっている）は何かと、我々に問うているように思われる。

3. 修道院から釜ヶ崎へ

本節では、実際に実社会で『深い河』の大津と似たような生き方をしていると思われる本田氏の神父としての生き方に注目する。それぞれ虚構と現実の人物であるが、二人の司祭の共通点を見出すことでキリスト教、あるいは宗教そのものへの認識を新たな視点で考えてみたい。では、本田神父はどんな方であるのかみてみよう。

前述したように本田哲郎神父¹⁸（1942～ ）は、大阪あいりん地区（釜ヶ崎）¹⁹で長い間日雇い労働者の支援活動に携わっている。本田神父について簡単に紹介すると、彼は台湾の台中で生まれ、3才の時に奄美大島に引き揚げてきた。1966年に上智大学神学部を卒業した後、フランシスコ会に入会し、1971年に叙階された。本田神父は、パチカンにあるローマ教皇庁立の聖書研究所へ留学し、そこで学んできた聖書学者でもある。彼はさらに、エキュメニズム運動が世界的に盛んになったことをきっかけに、日本でもカトリック教会とプロテスタント教団などが宗派の壁を越えて聖書の新しい日本語訳に取り組んだとき、新共同訳聖書実行委員会のカトリック側のメンバーに加わり、そこで編集委員と翻訳に参加した。新共同訳聖書は、1989年に日本聖書協会から初版が刊行された²⁰。1983年、フランシスコ会の日本管区の総責任者である日本管区長に選ばれて6年間務めた。日本管区長の任期を終えた本

田神父は、1989年から大阪市西成区あいりん地区の社会福祉法人ふるさとの家施設長を務め、1998年に退任する。彼はその後も、釜ヶ崎の狭いアパートに住み、そこで「釜ヶ崎反失業連絡会」などの活動に取り組んでいる²¹。その一方で、彼は盛んに執筆活動を行っている。また講演する機会も多く、その場は多様である。『釜ヶ崎と福音』²²（岩波書店、2006年）、『聖書を発見する』（岩波書店、2010年）や福音書の個人訳『小さくされた人々のための福音』（新世社、1990年）など多くの著作があり、対談集『福音の実り』（オリエンス宗教研究所、2016年）がある。以上、本田神父が書いた著書や対談集、また講演会の記事などを参考にして、彼がこれまで司祭として歩んで来た道を大まかに調べてみた。

ではまず、なぜ本田神父は釜ヶ崎に行くことになったのか。その経緯や思いについて探ってみよう。彼が釜ヶ崎で日雇い労働者の支援活動に参加するようになったきっかけは、彼の著作や対談集などに掲載されており、また講演会や雑誌、テレビのインタビューなどで知られている。フランシスコ会の日本管区長に選ばれた時に、彼は視察場所の一つである釜ヶ崎を訪問する。夜回りの際、路上に寝ている労働者の一人に毛布を配ろうと声を掛けるが、相手に被害を受けるのではないかと彼は怖がっていた。しかし、むしろ毛布を渡された人は彼に笑顔で感謝の言葉を言ってくれた。「聖書研究所で働くことになった時も、フランシスコ会日本管区の管区長に選ばれた時も、誇りでいっぱい」²³であった本田神父は、野宿を余儀なくされている労働者の中に、人を生かす力を発見した。その時の嬉しい体験は、彼の信仰を問い直すきっかけとなって、自ら希望してあいりん地区へ赴任してきたのである。そこで街の人々と生活を共にすることで、キリスト教の教えや聖書の言葉の本質が見えてきて、新たに聖書を読み直すことになる。聖書の読み直しは福音を再発見することになり、それが結果として教会の偽善性を批判することにつながったと考えられる。

ではここで、本田神父が、従来と違う視点で聖書を読み直し、新しい理解を求めている箇所を一つ例に挙げて見よう。彼は、ギリシア語の「アガペー」、ヘブライ語のアハバーという言葉の意味を明らかにして、キリスト教で一番大切にされている「愛」という言葉は、「大切」と訳した方が妥当であるという。例えば、「隣人を自分と同じように愛しなさい」²⁴という語句を取り上げて、「愛」と訳すと、無理が生じ、不必要な苦しみが生じるので、「大切」と変えて、「人をその人として大切にすること」という意味に変えるべきだという²⁵。その他にもたくさん箇所を取り上げて、彼独自の釜ヶ崎の視点で聖書を翻訳し直している。

しかしそれだけではなく、彼独自の活動や言動は教会の意に反するところが多く、それゆえカトリック教会側や彼が所属している修道院、また一部の信徒の間では異端扱いされることもある。いくつかの例を挙げると、聖体拝領²⁶はカトリックの洗礼を受けた信徒に限られているが、釜ヶ崎での毎週のミサでは未信者にも与えている²⁷。また、普通ミサをささげる時、司祭は祭服を着込むのに、彼の場合はTシャツとサンダル履きの姿であるとか、労働者と一緒に作業をするとか、などである²⁸。

このように、普通、他の司祭とはかけ離れた行動や活動を普通にしてきたため、いわばそ

れらが、教会の権威主義・形式主義を批判することにつながっているとみなされた。そのため、本田神父はカトリック教会で異端扱いされ、彼が出す本や聖書の翻訳などには条件²⁹が付けられる³⁰。第2バチカン公会議以降、カトリック教会においても歴史的批判的研究法が認められ、その方法によって聖書学は盛んになってきた。しかしそうであっても、教会側は本田神父による聖書の読み直しを認めなかったことがわかる。それにとどまらず、修道会からも除名されかかって、教会裁判が開かれたこともある³¹。要するに、彼は教会側から厄介者扱いされているということであろう。

本田神父はどんな心構えで野宿者の支援活動に携わっているのか。『釜ヶ崎と福音』の表紙には、ニューヨークの炊き出し風景を描いた F.アイヘンバーグの『炊き出しの列にならぶイエス』の絵が使われている。本田神父は、知人の牧師が言ったことや、この絵が語っていること、また自分が釜ヶ崎で体験したことと気づいたことを、次のような言葉で表している³²。

小さくされた者の側に立つ神……

「サービスする側ではなく、
サービスを受けねばならない側に、
主はおられる。」

小さくされている側に
神の力は働いている

本田神父は、F.アイヘンバーグの絵が語る「サービスする側よりもサービスを受けねばならないほど弱い立場に立たされたその人たちの側に主がおられる、キリストはそういう方なんだ」³³ ということに強い共感を覚えたのだ。それゆえ彼自身、日頃「社会的に小さくされてしまっている人たちの側にいるのか」、また「アイヘンバーグさんの目と感覚を私も共有するようになったのか」ということを考えながら支援活動をしている³⁴、という。まさに、上記の文章は支援活動に携わる本田神父の思いを物語っていると思われる。

本田神父は、『深い河』の大津と同様にカトリックの司祭でありながら、教会の組織や儀式など、形式的なものにとらわれず、福音そのものを実践していることがわかった。それはやはり、宗教や宗派を超え、さらに宗教の枠を超えた彼の認識があったからこそ可能であったと考える。

4. 終わりに

本稿は、『深い河』の大津の生き様を中心において、虚構の世界だけではなく、現実のそれに相当する人物がいるのではないかという疑問から始まった。それで実際に、大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者の支援活動に携わる本田神父を取り上げて、現実の虚構化および虚構の具現化といった視点で、二人のそれぞれの生き様について考察してみた。

二人とも教会の規範から逸脱した生き方をしているがゆえに、教会側から異端視され、厄介者扱いされている。しかしながら、二人にとって大切なのは、宗教や宗派という枠ではなく、どれだけキリストの教えそのものを実践していくかどうかであった。彼らに共通しているところは、なによりも貧しく小さくされた人々と共にいることであった。

「宗教としてのキリスト教を卒業した方がいい」³⁵とか、「宗教としてのキリスト教を突き抜ける」³⁶ 必要があると思っている本田神父や、「ぼくは玉ねぎを信賴しています。信仰じゃないんです」³⁷ といった大津、彼らにとって、もはや宗教という枠すら意味がないと考えられる。本稿のこのような試みは、彼らの生き様を深く理解するだけではなく、彼らの考えをもっと広めたいという願いから生まれたものである。

今後、本田神父についてより詳しく記述し、この両者の関係をさらに明確にしていきたい。

* 論文中に引用した『深い河』は、『遠藤周作文学全集 4』（新潮社、1999年）に拠った。

【注】

- ¹ 佐藤泰正 「『深い河』再読」『キリスト教文学研究』第16号、日本キリスト教文学会、1999年、26頁。
- ² 小嶋洋輔 「『それぞれの救い』、『宗教的なるもの』の文学—遠藤周作『深い河』論」千葉大学日本文化論叢 (4)、千葉大学文学部日本文化学会、2000年、32頁。
- ³ 長濱拓磨 「『深い河』とキリスト教〈母なるもの〉イメージをめぐって」『キリスト教文芸』第一七輯、日本キリスト教文学会関西支部、2000年、64頁。
- ⁴ アシェンソ・アデリノ 『遠藤周作—その文学と神学の世界』教友社、2013年、240頁。
- ⁵ 玉置邦雄 「『深い河』論—〈彷徨える人間〉の形象化を巡って」『作品論遠藤周作』笠井秋生、玉置邦雄編、双文社出版、2000年、285頁。
- ⁶ 遠藤周作 『遠藤周作による遠藤周作』青銅社、1980年、85頁。
- ⁷ 遠藤周作 『私にとって神とは』光文社、1983年、20～21頁。
- ⁸ 松村明編 『大辞林』三省堂、2006年、1233頁。
- ⁹ 『新カトリック大事典Ⅲ』研究社、2002年、390～391頁。
- ¹⁰ 前掲書、1990頁。

- ¹¹ 遠藤は『「深い河」創作日記』1991年9月5日付には、ヒックは基督教神学者でありながら世界の各宗教は同じ神を違った道、文化、象徴で求めているとのべ、基督教が第二公会議以後、他宗教との対話といいながら結局他宗教を基督教の中に包括する方向にあると批判しているとしている。
- ¹² 武田秀美「遠藤周作『深い河』——「多元的宗教観」のテーマをめぐって」『キリスト教文学研究』16号、1999年、89～90頁。
- ¹³ 笠井秋生「『深い河』の作中人物」『キリスト教文学研究（16）日本キリスト教文学会、1999年5月、57頁。
- ¹⁴ 第2バチカン公会議（1962年～1965年）は、ローマ教皇ヨハネ23世のもとで開かれ、後を継いだパウロ6世によって遂行されたカトリック教会の公会議である。教会の現代化をテーマに多くの議論がなされ、一六の文書が可決された。
- ¹⁵ 小嶋洋輔「『沈黙』と時代——第二バチカン公会議を視座として」『日本近代文学』日本近代文学会、2004年、10月。
- ¹⁶ 第2バチカン公会議で可決された16の文書とは、「典礼憲章」、「広報機関に関する教令」、「教会憲章」、「東方カトリック諸教会に関する教令」、「エキュウメニズムに関する教令」、「教会における司教の司牧任務に関する教令」、「修道生活の刷新・適応に関する教令」、「司祭の養成に関する教令」、「キリスト教的教育に関する宣言」、「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、「神の啓示に関する教義憲章」、「信徒使徒職に関する教令」、「信教の自由に関する宣言」、「教会の宣教活動に関する教令」、「司祭の役務と生活に関する教令」、「現代世界憲章」などがある。
- ¹⁷ 遠藤周作「深い河」『遠藤周作文学全集』第4巻、2000年、新潮社、323—324頁。
- ¹⁸ 神父とは、司祭に対する敬称であって、司祭は、カトリック教会の聖職者名なのでそれぞれの場合に応じて言葉を使い分ける。
- ¹⁹ あいりん地区は高度成長期にニュータウン開発や、工場建設のための労働者を派遣する大規模な基地になった。
- ²⁰ 本田神父『聖書を発見する』岩波書店、2010年、25頁。
- ²¹ 本田神父が書いた本や対談集、また講演会の記事などを参考にした。
- ²² 文庫版は、岩波書店で2015年刊行された。
- ²³ 「朝日新聞 関西 DIGITAL」2008年4月4日
- ²⁴ マタイ福音 22章 39節の言葉
- ²⁵ 『聖書を発見する』岩波書店、2010年、226～230頁。
- ²⁶ イエス・キリストの最後の晩餐に由来するが、ミサ聖餐において洗礼を受けた信者がキリストの体になったとされるパンと葡萄酒を食する儀式。
- ²⁷ 『福音と世界』新教出版社、2009年、60～61頁。
- ²⁸ NHK 教育テレビの「こころの時代」（2008年7月13日）で放映されたものの書き起こし参照。
- ²⁹ 教会側が設定した条件が三つある。その三つとは、カトリック新聞では広告を出してはいけない、翻訳した聖書のどこかに「これは日本カトリック司教団公認の朗読聖書ではありません」という一文を

入れること、できるだけ聖書っぽくない包装にすることである。

- ³⁰ 本田哲郎「基調講演 日本におけるエキュメニカル運動の課題と展望：現場からの問いかけ」『キリスト教文化（10）』かんよう出版、2017年、53頁。
- ³¹ 前掲書、54頁。
- ³² 2015年に刊行された文庫本の表紙には、絵が使われず、また、最後の2行はない。
- ³³ 本田神父『釜ヶ崎と福音』岩波書店、2015年、v-vii頁。
- ³⁴ 前掲書同
- ³⁵ 本田哲郎「基調講演 日本におけるエキュメニカル運動の課題と展望：現場からの問いかけ」『キリスト教文化（10）』かんよう出版、2017年、59頁。
- ³⁶ 上掲書、61頁。
- ³⁷ 16と同じ、218頁。

Journey to the Gospel beyond religion

- Focusing on Otsu and priest Honda Tetsuro in “Deep River”

Younghwa Lee

Abstract

This paper focuses on Otsu of "Deep River" of Endo Shusaku as the character in fiction and reality that has not been covered in previous studies. I have come to think that a priest who has the same idea as Otsu in a novel might actually exist in reality. In the meantime, I learned about Honda Tetsuro, who is supporting daily workers in Kamagasaki, Osaka. This paper examines the lives and activities of these two priests, Otsu and Honda, and looks at how they think about Christianity and religion itself and at the same time considers what they ultimately pursue as the priests in fiction and reality, both carrying out their own priesthood.

Keyword: Deep River, Otsu, Honda tetsuro, religion, nature or substance, gospel